



アジア研究センター主催シンポジウム アジアとアメリカ帝国のはざまを生きた人々の物語り (Lived Stories at the Crossroads of Asia and the American Empire)

編集 村井寛志

前記：2023年1月17日、みなとみらいキャンパス・米田吉盛記念ホールにて標記シンポジウムが開催された。以下は当日の報告・討論の記録である。

知花 愛実（司会、神奈川大学アジア研究センター所員）：皆さんこんにちは。本日は、神奈川大学アジア研究センターシンポジウムにお越しくださいましてありがとうございます。本日の司会進行を務めさせていただきます知花と申します。よろしくお願いします。それではシンポジウム開催にあたり、主催者、アジア研究センターを代表しまして、山家所長よりごあいさつ申し上げます。よろしくお願いします。



ごあいさつ

山家 京子（神奈川大学アジア研究センター所長）：

皆さんこんにちは。さて、アジア研究センターについてまず簡単にご紹介したいと思います。アジア研究センターは、本学の学部・研究科の横断的な研究組織として2013年4月に開設されました。アジアおよびアジアの諸地域を対象に、政治、経済、社会、文化、科学技術など、個別学分野の枠を越えた総合的かつ学際的な研究に取り組み、調査研究と学術交流を通し、アジアの平和と発展に寄与することを目的としています。

自分の話で恐縮ですが、私は都市計画、まちづくりを専門としています。都市の歴史を俯瞰（ふかん）する時、歴史が分断される理由は2つあります。すなわち災害と戦争です。都市そして建築は人々の記憶の器と言われるのですが、この2つによって記憶の器である建築・都市は壊れてしまいます。

2019年末から始まっていまだ終息の気配がないコロナパンデミック、そしてロシアによるウクライナ侵攻。コロナパンデミックは疫病という災害です。地震のように直ちに都市が壊れるということはないのですが、何かしら建築・都市の在り方を変えていくだろうと言われています。ウクライナでは今も歴史をつないできた建築物が破壊されています。そしてアジアを語る時に、占領・統治は避けて通ることのできない重要なテーマです。

私はまちづくりに関わる時に、住民という抽象的な言葉ではなくて、Aさん、Bさんという呼称、そして個人が集まった集団を意識するようにしています。コロナによる死者が何人、あるいはウクライナ侵攻による死者が何人というような報道がありますが、それはただの数字ではありません。それぞれに家族があり生活があります。人々の物語に着目した本日のテーマは、本質的かつ刺激的なものだと感じており、私自身とても楽しみにしています。



終わりになりますが、今回のシンポジウム開催にあたりまして、実に多くの皆さまにお世話になりましたことを改めて厚く御礼申し上げて、私のあいさつと代えさせていただきます。

知花：山家先生、ありがとうございました。それではこれより講演者の発表に移りたいと思います。本日御1人目の講師、琉球大学国際地域創造学部准教授・山里絹子先生はハワイ大学マノア校大学院社会学部の博士課程を修了され、現在は琉球大学国際地域創造学部でご活躍中でございます。山里先生は、アメリカ研究、社会学、移民・ディアスポラ、戦後沖縄文化史、ライフストーリーなどを専門分野としており、昨年4月に集英社から御著書『「米留組」と沖縄—米軍統治下のアメリカ留学—』を出版されました。それでは山里先生、よろしくお願いします。

講演①

「米軍統治下のアメリカ留学—「米留組」と呼ばれた人々の語りからの考察」

山里 絹子（琉球大学国際地域創造学部准教授）

ご紹介いただきありがとうございます。琉球大学の山里と申します。本日はよろしくお願いします。私の発表では1945年から27年間続いた、アメリカの統治下の沖縄において実施された米国留学制度、いわゆる「米留」制度に焦点を当ててお話しいたします。「米留」制度というのは、アメリカ政府がガリオア基金、占領地救済政府基金などといったアメリカ政府の軍事予算を用いて、統治下の沖縄の若者にアメリカの高等教育を受けさせるという目的で設立された奨学制度です。戦後間もない1949年から沖縄の施政権が返還される1972年の2年前、1970年までその制度が実施され、合計1,045名以上の沖縄の若者がアメリカの大学で学ぶために渡米しました。



戦後の沖縄社会において米国留学制度は「米留」制度、そして米国留学経験者は「米留組」と呼ばれました。私の研究では、「米留」制度がアメリカの対沖縄統治戦略においてどのように位置付けられていたのか、それをアメリカの公文書館の資料を読み解いて、さらに当事者、米国留学経験者たちのインタビューを通して彼らの留学前、留学中、留学後の足跡をたどり、彼らの語りから「米留組」と呼ばれた人々の経験を考察しました。

今日の発表は、私が集英社のほうから2022年の4月に出版させていただいた、『「米留組」と沖縄』の本の内容を主に、第1章「米留制度の創設と実施」、第2章『「米留組」の戦後とアメリカ留学への道』に焦点を当ててお話をしたいと思います。私のこの研究は博士論文の調査として行いました。博士論文を書き上げた時から新書で出版したいという強い気持ちがありました。貴重な出会いと応援してくれる方の存在があって出版につなげることができました。

一般書の出版にあたって、大きく以下の2つの動機がありました。まず留学といったテーマから、沖縄が歩んできた歴史とまた現在の状況について、より多くの人に関心を持ってもらいたいという気持ちがありました。ご存じのように沖縄には今も米軍基地が集中していて、米兵による性暴力、貧困、環境問題などの問題が大きな現実として存在しています。そのような中で大学で学ぶ機会を与えられるということは、どのような意味があるのか。ましてや留学の機会を得ることができるのは本当に一握りです。高等教育を受ける機会を手に入れた者たちが、その知識をさまざまな形で地域に還元できる社会の在り方を考えていきたいと思います。

2つに、戦争と戦後を経験した世代が高齢化していて、インタビューした方も多くお亡くなりになられていく、そういった中で少し焦りのようなものがあり、個々の証言を聞き取っていく、聞き取り書き

のこす、「のこす」は遺産の「遺」で、「遺していく」重要性を伝えていきたいという気持ちを込めて一般書の出版を決めました。

私の場合は、聞きたくても聞けない、間に合わなくて後悔ばかりが残っていますが、もしかしたら皆さん、戦後の世代を経験された方が身近にいらっしゃるのであればまだ間に合う、その方がご健在のうちにその方のこれまでの人生の語りをまず聞き書き遺していく。それは、戦後史を自分ごととして理解する上で大変有意義なものになるのかなというふうに感じます。

沖縄復帰 50 年の節目のタイミングでの刊行でしたので、本当にいろんな人が読んでくださって、読者の方から手紙を頂くことが結構多かったことがうれしく、驚きもありました。県内だけでなく県外の方からも手紙を頂くことが多かったですね。今日はその出版後に新たに得た知見や、また見えてきた課題についても提示したいと思います。よろしくお願いします。

まずは「米留組」という言葉ですけれども、その言葉を知っている現在の若い方は、もしかしたらほとんどいられないかもしれません。「米留組」という言葉を聞いたことがこれまでなかったという方、手を挙げてもらってもいいですか。ありがとうございます。実は私が教えてる大学の学生に、「この字何て読むと思う」と聞いて、「よねとめ組」とか、あと「める組」とか、かわいらしく読んでくれるんですけれども（笑）、初めて聞く方も多いですね。

戦後沖縄社会において「米留組」という言葉は、複雑な意味を含みました。親米派、親米エリートとステレオタイプで見られることがありました。戦後沖縄には米国留学制度と日本留学制度がありました。米国留学制度は「米留」、日本留学制度は「日留」というふうに言われていました。米国留学経験者は「米留組」と呼ばれましたが、日本留学者に対しては「日留組」という言葉はあまり向けられなかったんですね。戦後沖縄とアメリカのはざままで生きてきた「米留組」当事者の心境とか思いというのは、なかなかこれまで十分に考察されてこなかったように感じています。

研究の目的ですが、「米留組」を米国の冷戦史、植民地史の文脈で捉えつつ、それだけではなくて「米留組」の個々の物語を聞き取ることを通して、戦後沖縄という時代に対する個人の解釈から、沖縄、日本、アメリカの関係を描く、それらのはざまを生きた人々の物語を描くということが目的としてありました。

米国政府による留学制度の設立の意図、また沖縄の住民に対するアメリカのまなざしを理解するのには、米国中心の冷戦の枠組みが役に立つのですが、沖縄の住民にとっての「米留」制度に対する思いの複雑さは十分に捉えることができないかと思います。米国中心の冷戦アプローチだけで「米留組」を捉えてしまうと、統治下の沖縄に冷戦秩序を生み出す米国が重要なアクターであり、一方、「米留組」は単なる道具、米国の利益によって扱われる人々に過ぎないというふうに見られてしまう。当事者がどのような経験から「米留」に至ったのか、地域的歴史的な文脈を踏まえて、当事者の心情、例えば米留前のアメリカとの接点、アメリカに対する心情を聞くことをしたいと思いました。

「米留」に関する研究を私は 2009 年ぐらいから始めました。38 名にインタビューをしてまとめました。同窓会が作成した名簿を基に留学者の年代、性別、専門分野といった点において対象が均等になるように考慮しました。インタビュー対象者の全ては当時沖縄在住者でした。私の調査は県内在住に限っていて、アメリカに滞在してる、県外に滞在している方へのインタビューはできませんでした。

インタビューに協力してくれた方の年齢は当時 66 歳から 86 歳です。女性 10 名、男性 28 名です。アメリカ（本土）に留学したのが 27 名、ハワイに留学したのが 11 名で、留学期間は 2 年から 6 年で、最初に渡米した年齢が 19 歳から 34 歳でした。

沖縄の米国留学制度は、1950 年から本格的に始まります。1949 年に 2 人の派遣で始まりますが、50 年、東アジアを中心とする国際政治の情勢の変化に伴い、その制度が本格化していく流れがあります。つまり冷戦期における米国の沖縄に対する非常に重要な統治実践の一環とすることができます。

米国の冷戦期におけるアジアに対する戦略として文化・教育交流プログラムが重要であったということは、これまでの研究でも指摘されています。例えばクリスティーナ・クラインさんの研究 *Cold War Orientalism* によれば、冷戦初期、米国政府がアジア太平洋諸国に対して行った政策には、反共主義の

ような敵対する封じ込めの言説というよりも、アメリカ人とアジア人との紐帯の形成、つまり「統合の言説」が組み込まれていました。米国の中産階級や知識人とアジア人との人的交流から育まれたアジア観、アジアとの新たな絆とつながりが強調され、アメリカの政策への支持を獲得する上で重要な役割を担ったと指摘されています。

また、国際関係史研究者のナタリア・ツベートコバさんは、米国とソ連の留学制度に関する政策が、冷戦構造において両国のイデオロギーを推進する重要な役割を担ったことを指摘しています。米国がそれぞれの国における社会的リーダーを基準に選抜したのに対して、ソ連は労働者階級の人々を留学生として迎え入れるといった、両国における留学生のリクルートの方法が異なっていたことも指摘しています。

またアメリカ外交史研究の松田武先生の研究では、冷戦という当時の国際情勢の中、日本を同盟国として保持するために、米国で教育を受ける機会、相互の交流機会を提供するなどといった、ソフトパワーを重視した米国の政策が取られ、日本の知識人を、米国の政策や日米関係に関して、無批判にさせるような効果をもたらしたと述べています。これらの研究は戦後日本および冷戦構造下の日本において、米国の政府から支出される奨学金が政治的な役割を担ったものであるということを明らかにしています。

もう一つ、アメリカ研究者のナオコ・シブサワさんの重要な研究があります。*America's Geisha Ally: Reimagining the Japanese Enemy* という著書において、米国の教育を受けるために戦後間もなく米国の大学に留学生として受け入れた元日本軍の特別攻撃隊（特攻隊）について言及されています。元日本軍をアメリカに招き、彼らをよき日本人のモデルとして見せることで、東アジアにおける米国の同盟国としての日本という新たな関係を正当化する役割があったと指摘しています。シブサワさんは著書の中で、沖縄出身の留学生の曖昧なステータスについても言及しています。彼らは米国統治下の沖縄において被支配者であったこと。でも同時に元敵国、日本人であったということ。曖昧な立場の沖縄からの留学生がどのような経験をしたのかを明らかにする重要性についてもシブサワさんは著書の中で指摘されています。

「米留」制度に関する民政府の資料からは、「米留」制度が米国の沖縄統治戦略の一環であり、そこに民主主義の推進、戦後沖縄の経済復興という目的もさることながら、親米的指導者の養成と、沖縄統治を正当化し、沖縄住民の理解を得るという目的もあったことが見えてきました。

さらにアメリカに学びに来ている沖縄から留学生の姿を積極的に提示し、冷戦時代において、米国による民主主義の推進が世界の秩序と平和を生み出すものであるということを、国内外に宣伝する目的も担っていました。冷戦時代、アメリカがアジアにおけるプレゼンスの拠点として沖縄を確保するために、沖縄の統治を継続するためにも、「米留」制度は非常に重要なものであったということも分かってきました。

沖縄の留学制度の目的を実際に示す資料を一つだけここで取り上げてみたいと思います。留学生はアメリカに到着して、ミルズ大学でのオリエンテーションを受けました。1963年に配布されたパンフレットにワシントン陸軍省公務課マックケープ陸軍大佐からの沖縄出身の留学生へのメッセージが書かれています。「琉球人がこの国を訪問すること、そして勉強することの主な目的は、米国の伝統、理想および行政機関に熟知し、またわれわれの目標と政策に共鳴する今日と将来の指導者を育成するため」。アメリカに到着した後、留学生が最初にこのパンフレットに目を通します。沖縄における留学生の役割が顕著に記されています。

先ほど述べたように、留学生の総数は21年間で1,045名でした。毎年少なくとも20名、多い年には90名近くの沖縄の若者が渡米しました。フルスカラーシップで、学費や滞在費など全部支給され、奨学金を貯めて沖縄の家族に送金した方も結構いたと聞いています。1960年代の前半は、反米意識を厳しく取り締まったポール・キャラウェイが高等弁務官を務めました。その頃は特に「米留」帰りの役割が重視されて、1963年の83名と派遣枠を広げて、1959年からはハワイへの留学が始まっていく流れになります。

沖縄からの留学生はどのような分野を専攻したのか。社会科学、人文科学、教育の順に多くて、経営

管理学とか英語教授法、また経済学が上位を占めます。専門分野は200ぐらいリストがあって、その中から受験生が希望を伝えることができるのですが、最終的な判断は民政府が決めます。派遣大学のほうも民政府が決定します。派遣された留学生の専門分野は経済復興という統治政策の意図に呼応するものであったことが分かります。

受験資格は、応募要項に、琉球に戸籍があれば留学支援を受ける資格があるという記載があります。

奄美出身者は1953年に復帰するまで受験資格がありました。復帰後は「日本人」とされて受験資格を失ってしまいます。在沖の奄美出身の方も、戸籍が琉球にない場合は「非琉球人」とされて、当時は「日留」、「米留」制度からも排除されました。つまり「米留組」は「琉球人留学生」として、アメリカへの渡航の許可や、留学後の就職のあっせんといったさまざまな点で特権を有していたことが分かります。

私の実父も「米留組」で、「日留」と「米留」の2つを経験しています。父が遺した日本留学と米国留学の渡航許可証2つを見てみると、シティズンシップを記載する箇所があって、そこに「琉球」と書かれています。統治下沖縄において「市民」として「米留組」は特権を有していたということが分かります。2020年に土井智義さんの『米国の沖縄統治と「外国人」管理』という素晴らしい研究書が出ましたが、「琉球人」がどのように定義されて、反対に「非琉球人」はどのように定義されて強制送還の対象になっていたのかを研究されています。

留学生の選別方法についてももう少し詳しく説明します。筆記試験（1次試験）と面接（2次試験）がありましたが、毎年約200名の応募の中で合格者は4分の1ほどでした。かなり多くの若者が関心を持って受験・応募したことが分かります。試験に合格したことを知らされても合格したって喜んでられない。いつ派遣が取り消されるか、ずっと最後、船に乗るまで、軍用船で行くんですけど、船に乗って船が出発するまでもほんとに安心できない。いつ取り消されるかって分からないという状況がありました。

さらに、2次試験を合格した後に身体検査があるのです。これも非常に厳しい身体検査で、肺炎を患って渡米できなかったという方もいます。また性病があるかないかを確認するために、服を全部脱がされて、数名のアメリカ人の医師の前を裸で白い線の上にそって歩かなくてはならなかったという証言もあります。そういった面で身体検査も非常に厳しく、また検査のされ方に関しても非常に嫌な思いをしたという証言があります。

また思想調査について語ってくれる方もいました。反米運動に参加したり、共産主義的な考えを示したりしたらアメリカに行けなくなるから政治的な思想を隠していた、そうせざるを得なかったってような、後ろめたさを感じながら「米留」の機会を手に入れたという方もいます。思想調査に関してはいろいろ証言を聞いてはいたものの、実際の公文書館の記録はほとんど私も目にしたことなかったのですが、調査の中でやっぱり米軍の諜報機関が、留学した沖縄の学生を留学先で調査していたということを示すような重要な記録が残っていたことが分かりました。

1948年にハワイの沖縄系移民の人たちの支援で、沖縄の学生がハワイに留学するんですけど、これは米軍による米留制度ではなくて、その1年前のことです。その留学生に対する思想調査が行われていました。その記録をメリーランドの公文書館で見つけた時に、私自身、アメリカ政府の奨学金でもらいハワイ留学をしているので、ハワイでそういうことが過去にやっぱりあったんだということがすごく衝撃で、本当に心が痛みました。

学生たちが受講している大学の科目とか授業内容が、大変細かく報告されていて、誰の先生の授業、その先生がどういう思想を持っているのか、共産主義の思想の疑いがあるとか、そういうことが細かく記述されていました。その後その報告書の最後のほうには、留学生の中にアメリカの敵になる可能性を持つ人物を排除するための対応がなされないとはいけない。“Enemy of the US”という言葉がはっきりと書かれていました。

アメリカの敵となり得る可能性がある学生を排除する方法として提案されたのが、ハワイで何が起きているのか調べることで、ハワイの「信頼できる保守的な琉球人」に留学生と接触させることを提案す

るというような文章が書かれていました。ハワイの沖縄系移民の支援による留学生の受け入れは廃止されます。ハワイの沖縄系コミュニティではなく、米軍が留学制度の実施の主体となるような制度に変わっていく流れがありました。今説明したように、「米留」制度派遣者の選別方法には、米軍の反共主義的施策が色濃く反映されていたことが言えるかと思います。

さらに、合格者には徹底的なオリエンテーションが行われていました。出発までの約10カ月に週2回の準備教育、もしくは4月から6月までの集中準備教育を受けたということです。これは民政府文化教育部の指導の下で、アメリカの歴史、政治、英語の会話、読解の指導、またはテーブルマナーなども習っていたということですが、その記録フィルムもあり、今公文書館で公開されてアクセスできるようになっているので、実際どんなふうにテーブルマナーを教えたのかっていうのも映像として残っているので、関心がある方は見てみてください。

続いて「米留」の動機についてお話しします。戦後の荒廃した沖縄で生活している若者にとって、「米留」は、学問への渴望を生み出す、生きていく実感とか、生きていくための希望を感じさせるものであったというふうに語られました。ある方のお話ですけれども、沖縄戦で大切な人を亡くして、将来の道が閉ざされ絶望していた時に会ったのが英語だった。新しい言語と知識を学ぶことで少しずつ心が癒やされていく、そして元気を取り戻していくっていう経験をされています。また高等教育を受けることに対して大きな希望を抱いていたことも分かりました。

さらに米国の統治下において渡航制限が敷かれる中で、米留に行くということは、島から出る、移動性を獲得するためのものとか、貧困からの脱却、またジェンダーの役割からの解放といった期待もありました。戦後沖縄において、「米留組」が自分の人生を切り開く目的のために「米留」の道を歩んでいったことも分かります。

戦争体験も「米留」を動機づける大きな要因でもありました。「米留」経験者は「米留」の動機を語る時に、自身の戦争とか戦後の経験に基づいて説明します。その語りには、戦争によって多くの命が奪われた日本の軍国主義に対する嫌悪感が表現されます。戦後沖縄が置かれた状況、自分の心境についても話が及びます。留学経験者の約半数が戦争体験者なんですね。沖縄戦で実際日本兵として戦った者とか、幼い年齢で沖縄戦を経験した者、県外に疎開していた者、九州に疎開していた者、またサイパンとか南洋群島に逃れ、そこで戦争を経験して戦後の引揚者として沖縄に帰郷した者。

米留組の戦争体験は本当にさまざまですけれども、悲惨な戦争を生き抜いた彼らにとって、やっぱり「米留」は希望であったというふうに述べている。沖縄に戦争をもたらして多くの命を奪ったのは日本の軍国主義であると語る。特に初期の「米留組」の中には、軍国主義の日本で学んだ経験、記憶から、日本への留学よりは米国への留学がよいという気持ちで留学したという方もいました。

1952年、21歳の時に留学したある方は、悲惨な戦場を実際目で見たことによって、日本の軍国教育の行く末を見たような感じであったと語っています。また1950年19歳の時に留学した方は、戦争を生き抜いたという罪の意識があって、生きられなかった方のために頑張って沖縄を建設しようというような気持ちが、米留を決定づける要因というふうになったと語っています。1960年24歳の時に留学した方は、まだ戦争中は8歳とすごく幼いかったのですが、山の中を家族と逃げている、当時は日本兵もアメリカ兵もどっちが敵なのか分からない。どちらかという日本兵のほうを怖く感じたっていうふうに語っています。戦後アメリカに留学する際、敵国に留学するという気持ちは全くなかったとその方は述べています。

留学前のアメリカ文化との接触も「米留」を動機づける要因でもありました。まず留学経験者の中には、家族や親戚がハワイや北米にいて、移民先の話を幼い頃から聞いたり、移民先から送られてくる手紙とか洋服とかお菓子などといった風習に触れたりすることで、アメリカが日本よりも身近な場所と感じる方がいました。特に移民経験がある者がいる家族においては、アメリカは遠い国のような感じではなかったっていうふうに語りました。

戦後沖縄において米軍の駐留は、アメリカ文化に接する機会を住民に多くもたらしました。1950年最初にアメリカの情報とか政策を沖縄住民に周知させる目的で設立された琉米文化会館というのがあり

ましたが、アメリカに関する映画とか本、雑誌、また音楽などを通して、アメリカの文化を沖縄社会に浸透させるような目的で設立されました。そこによく足を運んでいた者の多くが、特に1950年代後半から1960年代前半にかけて留学した方に多いんです。文化的にも経済的にも豊かなアメリカに強い憧れを感じていたのです。

「米留組」の個々の物語を聞き取ることで、米国統治下に置かれた戦後の沖縄の社会的状況が見えてきました。「米留」制度には沖縄の住民に高等教育を受ける機会を提供し、戦争で荒廃した島を復興させるという目的がありましたが、それだけではなくて、米国にとって重要な冷戦の文化戦略でもありました。民政府は「米留」経験者を、明日を導くリーダーとして大きな期待を抱き、英語手当など特権を高める機会を提供しました。

実際「米留」経験者は、米国の期待にうまく応えたと言えるかもしれません。アメリカ人のことをより良いパートナーであると語る方もいます。アメリカを真の民主主義の場、人種的に寛容な国であったというような語りを強調される方もいます。その語りは、米国の例外主義や冷戦の概念に拮抗^{きっこう}するような語りというよりも、むしろそのようなアメリカ観を再生産することに貢献したことも事実です。

それでも「米留組」を親米派と見るのはやはり単純過ぎるのかなと思います。ステレオタイプの表現とは対称的に、教育者として、活動家として、自らの留学の経験もしくは知見を地域社会に還元した方々がほとんどです。個人的な経験、地域、歴史的な文脈を考慮すると、親米派というステレオタイプの物語は違って見えます。日本による植民地化、軍国主義、そして戦時中の沖縄住民の残酷な扱いの記憶を有する人々にとって、米国への留学は、単にかつての敵国への留学としては映らなかったことが分かります。

特に悲惨な戦争体験を有する初期の「米留組」の中には、日本より米国を留学先として選ぶことがより自然な選択であったのです。「米留組」にとっての「米留」というのは、高等教育を受ける機会、移動する機会、自ら生活を改善する機会といった一種の希望でありました。彼らの語りからは、米国によってもたらされた社会的状況を自らの目的に利用するといった、個々の選択があったことが分かります。

今回の発表では著書の第1章と第2章の、「米留」制度の創設の背景や留学の動機について述べましたが、米国留学中の個々の経験であったり、留学後の経験についても本書では記述しています。今後の課題としては、「米留」が果たした役割を文脈的に整理し、学際的に分析する必要があります。日本の植民地史の文脈においては「米留組」より「日留」という制度がかなり重要な役割を担いました。「米留」だけでなく、「日留」と「米留」の総合的、学際的な研究が大切であると感じます。

また、これは読者から手紙をもらってそのやりとりから考えたことでもあるのですが、個々が有する「米留」制度に関する貴重な資料の保存の必要性があります。お手紙頂いた読者の中には、親や祖父母が「米留組」だったという方が結構いまして、その関係資料を送っていただきました。歴史を知るための公的な財産となり得るような貴重な資料で、その保存や公開についても今後取り組んでいく必要があると感じています。

また本研究を通して、ファミリーヒストリーとしての戦後史の聞き取りの重要性も認識しました。本書の後書きのほうで「米留組」のライフストーリーが、「隣にいる、もしくは少し離れたところにいる誰かのことを考えるきっかけになり、その人々のことを想い、支えるようになってほしい」という言葉を書きましたけれども、読者の方は本書を読んで誰のことを思ったのか非常に関心があります。戦後世代を生きた家族のことを思ったのか、留学したくてもできなかった人たちのことを思ったのか、できたらその人の人生を聞き取ってほしいと思いました、人生の物語の記述方法の課題もあります。戦争・占領の歴史の継承を自分ごととしてどのように学び続けていくかっていうことも大きな課題だなと感じています。

「米留組」の帰国後の勤務先などの情報も本書のほうに載っているのですが、ほとんどの方が教育関係の職に就いています。1963年の記録では34%が教育関係で、その中で琉球大学が60名です。

私の研究では県内の在住の方へのインタビューに限定されますが、県外に住まれている方、または海外にそのまま残ったという「米留」の方もいます。そういった人たちの記録は民政府の公文書にはな

かなか残っていないです。さまざまな分野でどのような経験をされたのか、役割を果たしたのかっていうのをもう少し深く細かく記録していく必要があるのかと思いました。

以上になります。ご清聴ありがとうございました。

知花：山里先生ありがとうございました。「米留組」と呼ばれた方々の歴史的背景やそれぞれの希望や葛藤が入り交じったヒストリー、非常に興味深いお話をいただきました。5分ほど質疑応答の時間を設けたいと思います。どなたかご質問がある方がいらっしゃれば挙手をお願いします。

永野善子（アジア研究センター客員研究員）：大変貴重な話をありがとうございました。「米留組」についてお話をお聞きするのは初めてなので、基本的な質問ですが、写真で見る限り、「米留組」っていうのは男性ばかりのようなんです、試験に対して応募する時に女性はなしとはっきり書かれていたのでしょうか。もしそうだとすると、それはアメリカ側の意図なんのでしょうか。

山里：ご質問ありがとうございます。男性だけに募集をかけてるということはなかったです。女性も全体の15%くらいは派遣されています。

ただ、女性が高等教育を受けるということに関して背中を押してくれる人がいるかいなかったというところも語りから出てきました。1人の女性の方は、「米留」は許すが国際結婚をしないという誓約書を書かされたといいます。家族の介護であったり家庭を守るといったような、ジェンダーの社会的規範に基づく役割を期待されたことで、「米留」に行きたくても家族や親せきに反対され、受験しないということがありました。それでも押し切って「米留」をした女性の方は、「米留」がまさにジェンダーの役割からの解放であったと語っています。家から逃れるには結婚するしか道がない時代に、家が求めるジェンダーの役割から解放されるためには「米留」制度しかなかった、そういう理由で「米留」を志す女性もいました。

しかし、やはり男性の方がやっぱり圧倒的に数は多いし、民政府のほうも戦後復興を担う、明日を導くリーダーとして男性の留学生を描きました。『明日へ導く人々』という映画のフィルムをみるとよく分かるのですが、女性の留学生はそのリーダーを支える、応援をする存在で、留学生として同じ米国で学んでいても、ジェンダーによって描かれ方が異なりました。

知花：他にはご質問よろしいですか。

一般参加者1：ご説明あったかもしれないんですが、琉球大学は何か特別な役割を果たしたのでしょうか。

山里：資料から見ても琉球大学で勤務するという方は1963年の時点で60名もいました。米国のミシガン・ミッションのプログラムは私が扱った「米留」制度とはまた別のプログラムですけれども、琉球大学を創立しても教える教員がいなかった。教員を確保するために、「米留」帰りの方がそこに配置されました。琉球大学の創設と密接に関わっていると思いますね。「米留」制度から戻ってきたら各分野での教育に貢献してもらおうという役割があったと思います。

先ほどの女性の「米留」者はどうだったのかっていうことにも関連しますが、やっぱり女性の「米留」帰りは、琉球大学において家政、ホームエコノミクスの分野で役割を担う期待があり、そういった分野に配置された女性の人たちがいました。ありがとうございます。

知花：ありがとうございます。それではちょっとお時間の関係もございますので、ここで質疑応答はいったん締め切らせていただき、休憩時間を取りたいとお思います。

“Mistresses and Handmaidens: Intimate Labor in Imperial Circuits” 愛人そして侍女—帝国回路内での親密な労働—

ヴァーナデット・ヴィキュナ・ゴンザレス (Vernadette Vicuña Gonzalez、ハワイ大学アメリカ研究学科教授)

知花：二人目の講演者のヴァーナデット・ヴィキュナ・ゴンザレス先生は現在ハワイ大学マノア校アメリカ研究学科の教授で、同大学のオナーズプログラムのダイレクターも務められております。先生はカリフォルニア大学バークレー校にてエスニックスタディーズの分野で博士号を取得されており、ご研究では観光と軍事主義、フェミニスト理論、ポストコロニアル理論など、アジア太平洋に焦点を当てた文化研究をご専門とされています。著書に、デューク大学出版より *Empire's Mistress: Starring Isabel Rosario Cooper* や *Securing Paradise: Tourism and Militarism in Hawai'i and the Philippines*、そして共著に *Detours: A Decolonial Guide to Hawai'i* など数多く執筆されております(下略)。



※以下、講演者の許可を得て当日の報告用ペーパーを翻訳したものを収録（知花愛実訳）

この発表では、帝国を支える重要な労働形態としてのインティマシー（親密な関係性）を考察する。20世紀初頭の太平洋におけるアメリカ帝国の試みは、多大な支援を必要とした。それ以前の帝国と同様に、遠くから他者を支配する範囲と規模は、様々な関係者（軍人、教師、官僚など）による恒常的な労働、インフラ（道路、軍事基地、学校、統治、法的構造など）の整備、そして思想（博愛、無垢、文明、安全）の流布と普及を必要とした。

特に親密さ（インティマシー）について話したい。思想、人間関係、仕事の種類などに示される親密さは、帝国の生活を円滑に運営し維持するのに役立った。今日は、20世紀前半の米比関係で展開された親密さの二つの側面について触れる。第一に、愛とロマンスによって展開された親密さは、アメリカ帝国の望ましきのイデオロギー的、感情的な枠組みを提供した。第二に、アメリカがフィリピンを占領していた時代に、フィリピン人女性を中心に担われた愛情こもった労働と介護の仕事を通じて築かれた親密さが、帝国と植民地の結びつきを強める関係を生み出した。

私の著書 *Empire's Mistress: Starring Isabel Rosario Cooper* を参照しながら、親密さ、セックス、ファンタジー（空想）の行為が植民者の冒険が依存していた帝国ロマンスの一端をどのように担ったかを分析する。この本は、フィリピン人とスコットランド系アメリカ人の混血で、[ショー・ビジネスの] ボードビル兼映画女優のイザベル・ロザリオ・クーパーを中心に書かれている。彼女は、ダグラス・マッカーサー將軍の若くてとても美しい愛人として知られている。アメリカ占領下のマニラで、白人アメリカ人の父とメスティーサ（混血）フィリピン人の母の間に生まれたイザベル・クーパーは、初期のマニラのエンターテインメント界でボードビル役者や映画女優として名声と悪評を得た。20歳の頃、マニラに駐留していたダグラス・マッカーサーに出会い、彼に付いて来るよう説得され、翌年、彼が[当時のアメリカ合衆国大統領] フーヴァーにより陸軍参謀総長に任命されるのを待ってからワシントンに行く。マッカーサーは彼女より30歳年上だ。二人は5年間不倫関係にあり、彼はオフィス近くのホテルにある愛の巣に彼女を住まわせた。不倫関係がうまくいかなくなると、二人は辛辣に別れる。その後、彼女はワシントンD.C.に拠点を置く弁護士と結婚するが、第二次世界大戦勃発直前に、彼の元を去

り、中断していたキャリアを復活させようとハリウッドに向かう。二度の短い結婚と13回のわずかな映画出演、ナイトクラブの役者としての長い活動を経て、イザベル・クーパーは1960年に自ら命を絶った。

本の中で私は、マニラからワシントン、そしてロサンゼルスまで、アメリカとフィリピンの植民地関係を背景に、彼女の生涯を物語っている。マッカーサーの軍事任務と権限、クーパーがアメリカのエンターテインメント文化を熟知しそれに関わっていること、占領下のマニラのコスモポリタンな風景、太平洋を横断する蒸気船など、クーパーとマッカーサーを同じ回路に引き込んだ条件は、権力の表現であると同時に象徴でもあり、より私的なスケールで影響を及ぼしていた。アン・ローラ・ストーリーは、これを親密さのミクロ政治と表現している¹。

私の著書では、クーパーとマッカーサーの関係を東の間の情事やロマンスとして描いたり、噂やゴシップ、風評によって再現されるものの淫らな詳細をさらに掘り下げたりするのではなく、彼女の人生のわずかなアーカイブではあるが、彼女が親密な関係をいかにしてやってのけたのかを理解しようとしている。なぜならそのような親密な関係は、トニー・バランタインとアネット・バートンが「(帝国が)依存する資源、地代、労働力を生み出す社会秩序」と表現するものに寄与したからである²。ロマンスや恋愛ではなく、労働としての親密さを理解し、再検討することで、アメリカ植民地時代のある特定のフィリピン人女性の禁断の移動とそのルートをたどり、この種の仕事の経路、機能、可能性を考察する。イザベル・クーパーと彼女のような女性たちにとって、家事や接待、相手をもてあそぶことから誘惑すること、セックス—それが「本物の」ロマンスを伴うかどうかは別として—、愛情や魅力の表現など、さまざまな親密なつながりや関係性を維持することは、一方では帝国の男性の私的・社会的ニーズに応え、世話をするという労働であり、急速に変化する植民地社会で自分自身が生き残るための手段でもあった。

帝国における仕事としての親密さという考えは、イザベル・クーパーの物語が現代の私たちに伝わる伝わり方に現れている。彼女が注目されるのは、使い古されたジャンルである悲劇的なロマンスのなかである。この物語—それは時間とともに固定化した物語であるが—によると、イザベル・クーパーは若い混血のフィリピーナであり、パワフルな白人兵士の軌道に絡め取られた。二人の激しい情事は、少なくとも彼女の側では、彼女の報われない愛が彼女を自殺に追いやったという絶望とともに、悲劇的に終わるのが常だ。これが私とイザベル・クーパーとの関係の始まりであり、それは、常にマッカーサーと絡み合っていた悲劇的でロマンティックな物語の終わり方だった。この話は繰り返され、マッカーサーについて書いた人たち、さらには彼女について書いた人たちにも大切にさえされてきた。

植民地主義のアリバイとしてだけでなく、コロニアルなジャンルとしてのロマンスの永続性は明らかであり、イザベル・ロザリオ・クーパーは概してその範囲内で語られている。愛という考えは、占領と帝国主義の暴力を弱めているように見える。この場合の暴力とは、地方を荒廃させ、何万人もの命を奪った実際の戦争や平定作戦などのことだ。愛を喚起することは、同意と相互の欲望を前提とし、さらにはそれらを活性化させ、この行為におなじみのジェンダー化され、性的な帝国関係の輪郭を引き出している。クーパーとマッカーサーの関係をロマンスや愛かのように主張することは、彼女らの関係が依存していた植民地世界における深く非対称的な権力関係を覆い隠す。それが誘惑の鍵となる部分である。

つまり、植民地世界におけるロマンスというこの考えが世界を作る力を持っていたのである。この考えは帝国主義的な欲望を掻き立て、物質的な暴力を覆い隠している。たとえスキャンダルに仕立て上げられたとしても（実際、それは年齢差や異人種間の関係に焦点が当てられ、別の関連する影響を持ち、帝国のより大きなスキャンダルから逸れた）、植民地のロマンスという考えに支えられた愛の労働は、

1 Ann Laura Stoler, *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 2012: 19. 以下も参照。McClintock, *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Context*. New York: Routledge, 1995.

2 Tony Ballantyne and Antoinette Burton, "Introduction: The Politics of Intimacy in an Age of Empire," in *Moving Subjects: Gender, Mobility and Intimacy in an Age of Global Empire*, eds. Tony Ballantyne and Antoinette Burton. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2009: 5.

帝国プロジェクトにとって極めて重要である。ロマンスの考え（特に失敗したもの）を通して、莫大な死者を出しながらも、帝国を好ましいもの、美しいものにさえする。イザベル・クーパーの物語は帝国の醜悪さを覆い隠す。それは帝国のロマンスが望ましい物語だからである。

第二に、この物語の中で親密さが現れるのは、帝国のコンタクトゾーンで築かれた関係を通じてである。それは、アメリカがスペインと戦争をし、次にフィリピンと戦争をし、長期にわたって諸島を占領すると決めたことで可能になった親密さである。旧世界のヨーロッパ帝国による占領から新しく近代的な支配へと急速に移行する状況下で、フィリピン人は多様で不可解なやり方で展開される勢力の社会的変化に直面していた。アメリカ帝国の明らかな人種の階層（ヒエラルキー）があるにもかかわらず、日常の植民地生活において、異人種間の親密さはタブーではなく、権力関係がしばしば交渉され、時には覆される場であることは明らかであった。

フィリピンとアメリカの家父長制が二重になっている場合には、フィリピン人女性はしばしば、19世紀後半のスペイン時代からあるフィリピン人女性の性行動に対する懸念と、アメリカの植民地支配によってもたらされた新しい社会の接触領域を満たす異人種間の親密とに直面した「二つの帝国との親密な交差点」をうまく切り抜けなければならなかった³。仕事としての親密な関係は、多くのフィリピン人女性が利用できる手段であることが多く、その多くは暴力によって強制されたり、または暮らし向きによって導かれたりしたものであった。

マニラの都市の近接さは、ネイティブと植民者の間に異人種間の親密さ、交流、そして禁断の関係を生み出した。フィリピン人とフィリピン人女性は、植民地生活の従属的なものとして植民者のために住居をかまえ、使用人、料理人、洗濯人としての日常生活の快適さを提供したり、交際や性交を通して援助や、娯楽、快楽を提供したりした⁴。このように、アメリカ軍兵士は地方でゲリラと戦っていたにもかかわらず、コンサートやダンス、食事などの組織的な活動でフィリピン人と付き合い、フィリピン人の「ホスト」と交わり、歓迎を受けたことに感謝していた⁵。フィリピン・アメリカ戦争のこの時期（1902年の公式終了日以降）には、米軍が部隊内の性感染症を制圧するために売春を規制する事業があった⁶。言い換えれば、植民者の試みは、帝国が規律しようとした異人種間の親密な関係性を生み出し、フィリピン人女性はしばしば不利な立場に置かれた。マニラにいたアメリカ人の独身男性は、キャバレーから売春まで、街の禁制の娯楽によくもてなされた。元兵士でフィリピン人と結婚したジョン・キャンソンが所有していたサンタアナ・キャバレーは、市内と路面電車で結ばれていた。このクラブは戦略的に幅広い客層を狙っていた。白い囲い柵の片側には高級将校や政府管理者のために晚餐ができるリネンのテーブルクロスで客席を設け、反対側では、癒やしと女性との交際を求める軍人の独身者が一曲料金制で待機しているフィリーピーナタクシーダンスと踊っていた。

他にも合法的あるいは正当に認められた親密な関係があり、それが白人アメリカ人とフィリピン人の間の社会的・人種的な境界線を維持しようとする多くの植民者にさらなる不安を与えた。そのような親密関係にあった一組が、帝国のはざまで出会ったイザベル・クーパーの両親だった。ウィスコンシン州出身の白人兵士アイザック・クーパーは、1898年の米西戦争勃発を機にフィリピンに渡った。彼はアメリカ中西部出身の多くの若者と同様に、アメリカの男らしさを誇示できる最後のフロンティアで自身自身を証明する機会に奉仕するよう招集されたのだ。セオドア・ルーズベルトはこれをロマンチックな帝国の試みと表現している。米西戦争が速やかに終わった後、これに続くフィリピン・アメリカ戦争とその結果としてのアメリカによる占領の期間までアイザック・クーパーはフィリピンに留まることにな

3 Denise Cruz, *Transpacific Femininities: The Making of the Modern Filipina*. Durham and London: Duke University Press, 2012: 73.

4 Julius Bautista with Ma. Mercedes Planta, "The Sacred and the Sanitary: The Colonial Medicalization of the Filipino Body." in *The Body in Asia*, eds. Bryan S. Turner and Zheng Yangwen. Oxford and New York, Bergahn Books, 2009: 157.

5 Winkelmann, "Dangerous Intercourse," Kramer, *The Blood of Government*, 105.

6 Paul Kramer, "The Darkness That Enters the Home: The Politics of Prostitution during the Philippine -American War." In *Haunted By Empire: Race and Colonial Intimacies in North American History*, ed. Ann Laura Stoler. Durham: Duke University Press: 366-404.

った。除隊後は米国公務員の消防士として働いたが、マニラでの生活でフィリピン人と親しくなり、その中にジョセフィーナ・プロタシア・ルービンという若い女性がいた。ジョセフィーナ・ルービンは、ラグナ地方出身の三人の孤児姉妹のうちの一人で、結婚して貧しい関係から解消されることを望んでいた。少なくとも姉妹のもう一人もアメリカ人と結婚した。

アイザック・クーパーのような地位のアメリカ軍人や民間人は、フィリピン人女性や、時にはフィリピン人男性と様々な取引をした⁷。子供が関係している場合でも、ほとんどはカジュアルで一時的なものだった。しかしアイザック・クーパーは、人間関係に関しては誰にも劣らず真面目だった。ジョセフィーナ・プロタシア・ルービンは、アイザック・クーパーより20歳年下で、彼と結婚したときはかなり若かった。彼女は貧しくして結婚生活に入り、すぐに彼の子を産んだ。彼女は彼のために家を守り、代わりに彼は彼女とその家族を支えた。

二人の間に生まれたイザベル・ロザリオ・クーパーは、フィリピン諸島におけるフィリピン系アメリカ人混血の第一世代だった。彼女は占領していたアメリカ人と植民地化されたフィリピン人との親密な取引の証拠を体現していた。イザベル・クーパーの両親は正統な夫婦関係を結んでいたが、そのような関係もまた、フィリピン滞在中のさまざまな植民者人士に感情的そして性的な充足感を与えていた親密な行為の織りなす綾の一部であった。これらの関係は帝国を正常化し、コンタクトゾーンでの日常生活の現実に同意の場を作り出した。こうした親密な関係を労働の一形態として理解することによって、それが歓楽街で行われたものであれ、家庭の親密な空間で行われたものであれ、金銭で支払われたものであれ、家庭生活の快適さと安全性と引き換えに支払われたものであれ、親密な関係を植民地の社会をひとつにまとめていた重要な行為や取引として見ることができる。

親密な労働の三つ目の例は、アメリカがフィリピンを長期にわたって占領していた時代の兵士たちの心のケアと娯楽である。この「レスト&レクリエーション」的な仕事は、イザベル・クーパーの母親が関わっていた種類のものとは異なる。なぜなら、それは快楽と娯楽の労働として普遍的に理解され、保証されていたからである。10代のイザベル・クーパーは典型的なミリタリーエンターテイナーであり、彼女の役作りと舞台での演技は特に効果的であった。彼女が無邪気でありつつ性的欲望を起こす存在として、海外赴任者の記憶に懐かしく思い出されるのは偶然ではない。ボードビルの舞台では、若々しくかわいらしい魅力で彼女は「えくぼちゃん」の愛称で親しまれた。これは私が研究の過程で最初に学んだことの一つであり、アメリカ植民地時代の人物ルイス・グリークの記憶を通して屈折したものであった。アメリカ人グリークが独身時代過ごしたマニラで、早熟で若々しい「えくぼのクーパー」は「無邪気かわいらしく」、最前列にいるアメリカ海軍の騒々しい歓喜に合わせてステージをゆっくりと横切る姿を記憶している。当然のことながら、グリークのマニラでの生活の記憶には、独身者が旅行中に見つける他の種類の娯楽も含まれている。

ボードビル女優のえくぼちゃんは、刺激的な純真さを磨くために努力した。彼女の代表的なパフォーマンスの一つで、彼女はティン・パン・アレーの歌「誰か私のネコちゃんを見かけたかしら？」の歌詞を口ずさむ。この歌は、自由を求める船乗りたちの熱烈な想像力に火をつけた。「私は一晩中座ってため息をついている／だって、アパートではひとりぼっちだから／ネコちゃんおいで、ネコちゃん、ネコちゃん、ネコちゃん／いいねネコちゃん、ネコちゃん、ネコちゃん／誰か私のネコちゃんを見かけたかしら？」グリークは、彼女が「私の寂しいネコちゃんを見つけるのを手伝って、彼女が独りぼっちで寂しいのはわかっているわ」といたずらっぽく誘い、このパフォーマンスを見た船乗りたちが「ヒューヒューと歓喜の声をあげていた」ことを特に覚えている。この歌とボードビルの舞台で、10代の彼女が作り上げた表向きの役作りは、植民地時代のマニラで「彼女のような女性たち」が果たした特別な役割を象徴している。

これには手間がかかった。イザベル・クーパーは純潔ではなかった。マニラの舞台に出演した俳優で純潔の者などいなかったが、彼女は確かに植民者の男たちの欲望をうまく利用して、自分にふさわしい

パフォーマンスを作り上げた。マニラの高級ボードビルの舞台では、コーラス・ガールは五万といた。えくぼちゃんは、ステージ上のポジションを争う有望なコーラス・ガールの中で、一番才能があったり美人であったりするのが自分であるわけではないことを知っていた⁸。彼女が駆け出しのとき、マネージャーは彼女を他の女の子たちと特に区別しなかった。彼女はコーラス担当で毎晩下積みの苦勞をしていた。彼女が舞台活動を続けるためには、舞台の独自の才能を磨く必要があった。イザベル・クーパーは、サヴォイトリヴォリの舞台の過酷な環境で、ボダビルという自国で生まれたボードビルの芸を学んだ。一日二回のスケジュールこなし、骨の髄まで働いただけでなく、「毎晩歌い、踊り、身悶え、くたくたに疲れながらも」パフォーマンスをするための体力づくりもした⁹。要するに、この親密なエンターテインメントの労働を行うには多大な労力を必要としたが、それ以上に大きな労力を必要としたのは、彼女は約束された愛を大衆に届けなければならなかったからである。

この場合、親密な関係の労働を通じて彼女が切り開くことができたチャンスは、彼女に名声と富をもたらした。イザベル・クーパーは、自身が（異人種間の親密な関係の産物として）混血であることを利用して、接近しやすいフィリピン人女性と、か弱い白人女性とからなる捻れた性的魅力を、舞台の仕事と成功しつつあるキャリアに取り入れた。フィリピン人女性の女性らしさに心奪われていた歴史的な時期に、イザベル・クーパーはその無邪気な演技を典型的な現代アメリカの純情娘役で演じたために、話題をさらうことになった。若くモダンなえくぼのクーパーは、アイデンティティと直面しているマニラで、フィリピン人女性の新しい表象となり、将来有望で憂慮すべき女性の理想となった。そのおかげで、フィリピン映画界の黎明期における現代フィリピーナ／アメリカン美女の顔となり、マニラの舞台という地域性を超えて活動範囲を広げた。

兵士たちをもてなす仕事を通して彼女はマニラ首都圏のローカルな舞台を越えて、島全体の劇場へと進出した。えくぼちゃんは、フィリピンの無声映画のいわゆる 1920 年代の栄光の日々にふさわしい場所に、ふさわしい顔で、ふさわしいタイミングでいた¹⁰。ハリウッドから戻ってきたばかりの若くカリスマ性のある野心的な監督ピセンテ・サランビデスは、彼の映画 *Miracles of Love* にモダンなルックスの若い女性を求めていた¹¹。彼はこの映画に野心を抱いていた。それは、テンポの速いモダンなロマンスとしてのフィリピン製ハリウッドの先駆けとなるものだった。恋愛対象となる役に、ペースの速いモダンな女の子を必要としていた。混血のルックスとアメリカン・ティン・パン・アレーのレパートリーを持つイザベル・クーパーは、まさにその条件を満たしていた。イザベル・クーパーとしては、彼女の無邪気でキュートな舞台演技を変え、ロマンティック・コメディの女性主人公に起用され、現代のフィリピン系アメリカ人女優「エリザベス・クーパー」を世に知らしめた。歌やダンス曲による発声や表現に慣れていた彼女は、歌詞や生伴奏なしで無声映画を通した感情の伝え方を身につけた。また彼女は、すばやく動くカメラと監督の厳しい視線に自分の表情を合わせ、観客の即座の反応ではなく、長いストーリーラインに沿って役柄を成長させることを学んだ。

（フィリピンで初めて、そしておそらくアジアでも初めての）先駆的なキスシーンから生じたスキャンダルの批判に耐え、彼女はよりたくましくなった。ステージ上で観客からいやらしい目つきで見られることには慣れてきていた一方で、画面上のスキャンダルは全国的なものだった。彼女が世間で名声を得たり、この場合、悪評を得たりするにつれ、ゴシップ記事などを通じて自分への関心を高め、維持しようとした。エンターテインメントにおける愛の行為であるキスは、イザベル・クーパーのレパートリーにおける親密さの労働の一部であった。上陸休暇の「船乗り」たちの歓声を浴びたステージ上での色目を使った演技のように、彼女の映画作品、特にこの役とこのシーンは帝国台帳（に登録された米兵たち）に効果的であった。

私の著書では、キスとその結果としての映画の見せ場は、（一種の歪んだ愛）のスキャンダルを生み

8 Domingo, "Bare Knees."

9 Soriano, "The Dancing Girls," 45.

10 Nick Joaquin, as quoted in Pareja, "Roles and Images of Woman," 47.

11 Pareja, "Roles and Image of Woman," 210.

出し、帝国に尽力するようになったと主張している。スキャンダルに人々は憤慨し（そして興奮した）が、それはアメリカ帝国主義のより大きなスキャンダルから批判的な眼差しをそらす役割も果たした。フィリピン人女性が公の場で親密な関係を持つことに執着することは、フィリピン人の国民意識（ナショナル・アイデンティティ）とその将来への影響に対する道徳的な怒りと不安をかき立てた。しかし、キスをめぐるスキャンダルは、このアイデンティティ危機を引き起こした最も重要な構造的な原因を排除し、隠蔽している。それは、フィリピンにおけるアメリカ帝国の継続的な存在である。

イザベル・クーパー自身にとって、そのキスは最終的に彼女のキャリアに貢献した。彼女は雑誌を飾り、より多くの映画を求めていた。最終的に、彼女の知名度と名声が高まり、占領軍の最も重要な軍人の目に留まることになった。1928年にはリヴォリ劇場とサボイ劇場の大看板を務め、熱狂的なファンを集めた。この時点で、ダグラス・マッカーサーは離婚後間もなくフィリピンに戻っていた。彼はフィリピンの軍司令官に任命され、戻ってきていた。イザベル・クーパーとダグラス・マッカーサーは、出会って間もなく交際を始めた。

イザベル・クーパーは自身の母親を通して、社会の周縁にいるフィリピン人女性にとって、アメリカ人男性と交際することの利点を目の当たりにしてきた。この時点で、彼女の母親はアイザック・クーパーから離れ（そして彼をアメリカに残してマニラに戻り）、別の年下のアメリカ兵と交際していた。母親が作ったパターンを繰り返し、イザベルはマニラの自宅で將軍をもてなし始めた。歴史家のキャロル・M・ペティロは「二人の関係は、マニラのごシップでは秘密ではなかった」と指摘している¹²。

私はイザベル・クーパーがマッカーサーと恋愛関係になるこの時期を、彼女が長い間習得してきた欲望の演出であると考えている。しかしそれは、より親密なスケールで実行された。このような家父長制と帝国主義のもつれは、イザベルと彼女の母親のような女性が得られるチャンスを大きく形作った。彼女たちは帝国の仕事に参加し、「愛」の労働はフィリピンにおけるアメリカの植民地支配を維持するために不可欠であった¹³。イザベル・クーパーは、女性が担い、評価されていない労働に依存するアメリカ植民地の男性（および女性）との間の、取引の第二世代であった。

マッカーサーの禁じられた愛人としてのイザベル・クーパーの仕事は、注目に値する側面がある。こうした親密な関係が、帝国の権力のひび割れを示すことをも明らかにしている。ずっと年下の恋人に対するマッカーサーの執着は、彼女に宛てたラブレターに表れている。

「僕の愛は君を包み込み、僕の心の奥深くに刻まれる……愛する君の唇にキスをし、君の柔らかな体を僕の体に押しつけて……思い出が僕を病ませ、僕は気が遠くなるほど君を強く欲している。」

「君が来ると思うととても幸せだ……君の唇と目と足にキスをする……僕の大切な人よ、戻ってきて。そうでないと僕は死んでしまう。」¹⁴

「彼女は彼の執着の対象、彼の運命の愛人として以外の居場所はほとんどない。それでも、彼の熱い口説き文句、彼女を彼の欲望の小さな空間に閉じ込めようとする彼の決意は、彼らのような帝国の親密関係の足をすくう深刻な心配事を明らかにしている。マッカーサーは、自分のイザベルが無垢で子供のようで、彼の献身の対象であると想像し、望んでいる一方で、彼女がステージで生計を立て、名声を着実に断ち切り悪名を得る女性であることを知っている。彼が彼女に惹かれるのは、彼女の美しさだけでなく、アジア人女性が最初の妻と違っておとなしく従順だと根深く信じているからである。ある程度は、イザベル・クーパーがその役割を演じている。たとえそれが帝国の欲望が矛盾し腐敗に満ちた側面であっても、彼女は長い間、舞台や映画でこの種の役の需要と出番に精通してきた。要するに、権力を

12 Petillo, Douglas MacArthur, 151.

13 Tony Ballantyne and Antoinette Burton, "Introduction: The Politics of Intimacy in an Age of Empire." In *Moving Subjects: Gender, Mobility and Intimacy in an Age of Global Empire*, eds. Tony Ballantyne and Antoinette Burton. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2009: 5.

14 これらの引用は1976年のNational Enquirerの記事で公開された部分的な抜粋からのもので、情熱的な將軍の軽率な言動を嬉々として披露している。Dan Schwartz, "Passionate Letters Reveal the Sensational Love Affair of 50-Year-Old Gen. Douglas MacArthur—& a 16-Year-Old Filipino Girl," *National Enquirer*, September 21, 1976. この記事のコピーはモリス・アーンストの論文にある。

持つ男のアジア人女性に対する空想が、彼女の職業と社会的地位と相反している。その一方で、彼女の職業は彼がその空想をかき立てるのに役立っている。二人が不倫関係を維持するために必要な精神的な曲芸と、その人種的・性的空想は相当なものである。

二人の関係は、特にイザベル・クーバーの人生がその後どのように語られるかという文脈では、短いものである。イザベル・クーバーが20歳、将軍が50歳の時（そして二人の妻の間）に結ばれた五年間の関係だった。マニラからワシントン、ヨーロッパまで、感傷的なラブレターで記録されており、彼の愛人への執着がうかがえる。これらの手紙はその情熱と長さから、将軍の巨大なエゴや彼女の思いやりと配慮に依存していることと、彼が夢中であることを記録しているが、いずれも時間とともに弱まっていく。二人の関係には明らかに権力の非対称性があったにもかかわらず、彼女は感情の手綱を握り、（ナイトクラブへの外出、ヨーロッパでの部隊視察中のハバナへの一人旅、彼女の家族への援助など）自分の要求をすることを恐れていなかったことがわかる。最も明白なのは、ダグラス・マッカーサーがその価値以上に彼女を面倒だと判断した瞬間に、彼女が彼との関係を値札付きの親密さの取引にまで引き下げてしまうことである。彼らの交際は1934年の5月か6月に衝突して終わる¹⁵。イザベル・クーバーは、キャッソルドン・ホテルの愛の巣を出て、マッカーサーのオフィスから数ブロック先の下宿に引っ越す。

この瞬間を特に皮肉なものにする全国的に起きた歴史的出来事がある。1934年、アメリカはタイディングス＝マクダフィ法を成立させ、フィリピンの独立を認めたが、同時に、これによりフィリピン人の身分はアメリカ国籍者（US nationals）から変更され、他のアジア人と共に移民排斥の対象となった。アメリカでのフィリピン人移民の経験の特徴づける道理に反した恐怖体験や暴力は、フィリピン人男性が白人女性に接触するかもしれないという脅威から生じている。タイディングス＝マクダフィ法に続いて送還法が制定され、帰国を希望するフィリピン人移民労働者にフィリピンへの片道切符が無料で提供された。

イザベル・クーバーは父親からアメリカの市民権（citizenship）を得ていたが、マッカーサーは彼女をフィリピン人として明確に位置づけていた。彼は、彼女に近づき、手に入れることができ、彼女を必要としなくなったときには見捨てることができた。彼女をそのように利用することを可能にしている論理は、フィリピン人男性に白人女性との交際を禁ずる論理とリンクしていた。彼は別れの手紙にフィリピン行き片道切符を同封した。他のフィリピン人のように、彼女もまた望ましくない存在だということを理解してくれることを願ってのことだった。フィリピンからの労働力が一般的に国家被後見人として見られ、アジア移民排斥法によってできた溝を埋めていたにすぎなかったように、彼は明らかに彼女のことも消耗品のように見ていた。

強制送還法（the Repatriation Act）の失敗に伴って、イザベル・クーバーは他の多くのフィリピン人移民労働者と同様に、留まることを選んだ。母親のように彼女は、自分の目的のために植民者の男性との関係によって開いたチャンスに賭けた。支援もなくホームレスとなったイザベル・クーバーは、執着がもたらした将軍の慎重を欠いた証拠を必要な資源に変えるチャンスを見出した。その年にワシントンで広まっていた不倫の噂について、醜聞を暴くジャーナリストのドリュー・ピアソンが彼女を探し出した。ピアソンはマッカーサーから名誉毀損で訴えられており、イザベル・クーバーに頼んで将軍に訴訟を取り下げるよう説得してもらおうとしていた。イザベル・クーバーはピアソンの弁護士に、彼女に代わって交渉する権限を与えた。手紙の原本と二度と彼に連絡しないという合意と引き換えに彼女は示談金を得た。さらに彼女は、後に彼女の人生で大きな恩恵を受けることになる味方との関係を築いた。ある男性に捨てられた場所で彼女は、すぐに別の男性と仲良くなった。ワシントンD.C.の弁護士と結婚したのである。

彼女の本を書く上での課題の一つは、彼女の物語をマッカーサーの物語から切り離すことだった。明らかになったのは、マッカーサー自身は、彼女の人生を左右する帝国との親密関係の単なる換喩に過ぎ

15 破局の電報は1934年9月11日付のもの。ペティロは1934年9月1日に破局したが、1934年5月にはすでに彼らの関係は悪くなっていたようだ。

なかったということである。たとえ、彼女が様々な親密関係をうまく切り抜けてきたとしても、帝国との親密関係が彼女の人生を左右したことは変わらない。アメリカ合衆国とフィリピンの地政学的関係と親交は、官僚、宣教師、教師、兵士らに依拠していたのと同じくらい、帝国ロマンスをつくる男女関係と空想（ファンタジー）の結合力に依拠していたのである。

イザベル・クーパーの親密な仕事の四つ目の例は、ハリウッドでの空想（ファンタジー）の産出を下支えしたことである。ハリウッドでは、彼女がすでによく知っていた人種化されたロマンスと救済の考えが根強く、ハリウッド映画は帝国主義的挑戦にイデオロギー的、感情的な勢いを与えていた。マッカーサーとの関係が終わった後、イザベル・クーパーは生涯の最後の20年をハリウッドでフリーランスの女優として過ごした。

彼女の人生の最後の三分の一で明らかになったのは、帝国ロマンスの持続力と、それがその時代の彼女の人生とキャリアをどのように形作ったかである。マッカーサーとの関係が終わってから約6年後に第二次世界大戦が勃発した。その間、彼女は結婚したが、うまくいかなかった。そしてハリウッドに向かい、知っている唯一の仕事に賭けることにした。その戦争はハリウッドに利益をもたらした。この時代の映画は、救済と解放の語り口を新しい目的のために再利用し、古いものを再び新しくした。イザベル・クーパーがこの頃に得られた役は、必然的に彼女を祖国での実際の戦争やマッカーサーがその戦域で果たす役割に関連付けることになった。

戦時中のイザベル・クーパーの人生は、帝国の親密さが予期せぬ場所に織り込まれていることを明らかにしている。彼女の私生活の詳細は時々入り組んでいるが（その一部は彼女自身の創造力によるもので）、俳優としてのイザベル・クーパーは戦時中に注目された。このアーカイブが生み出す物語は非常に皮肉でありながらも、すでに馴染みのあるものだ。ハリウッドの新しい脚本の筋書きは、説得力があり、魅惑的だ。それらは、常にアクションの中心にいる白人の武勇伝のメロドラマ的な語り——傷を負いつつも敵を倒す男を描いた叙事詩的な映画——にぴったりの筋書きである。ハリウッドの野心的な混血女優にとって、戦争はおなじみの人種の区分に沿った帝国の欲求を高め、イザベル・クーパーのような俳優の仕事を生み出す¹⁶。アジア人や混血の俳優の需要は、太平洋やアジアを舞台にした映画に本物らしさを与えるためにますます高まった。

この時期に撮影されたイザベル・クーパーのスタジオ写真は、戦争によって急増したと思われる種の役を真っ向から狙ったものである。彼女はレイに身を包んだネイティブの女の子で、気を引くように微笑み、もてなしている。チャイナドレスを着て、髪に花を飾り、遠くを見つめている。別のシリーズでは、フィリピンの衣装を表すバタフライ・スリーブの明るい色のブラウスのテルノと暗色のロングスカートに身をまとっている¹⁷。これらの姿は入れ替えができると思われる。

ハリウッドでは、イザベル・クーパーが自身の過去に関わった人物やその背景を描いた映画に出演している。フィリピンは太平洋戦域の重要な場所であり、彼女の元恋人はその中心人物であることから、この時期の彼女の人生は、これらの過去と現在の親密さによって形作られている。開戦時にアメリカの支配下にあったフィリピンは、1941年に真珠湾攻撃と同時に日本軍の攻撃を受けた。フィリピン諸島は深い苦しみと劇的な解放の地として、アメリカ映画の舞台としてよく知られている¹⁸。アジア太平洋地域における連合軍の作戦で、苦戦しながらも最終的には勝利をおさめた英雄であるマッカーサーは、映画の筋にしばしば現れる。イザベル・クーパーは、ハリウッドで働く女性として、このような過去のエピソードから解放され自立することを模索しているが、この根深い植民地関係は彼女にそれができないことを示している。植民地関係は、彼女のすべり出しの自立の機会を、戦争と帝国との関係が背景に織り込まれた筋書きに結びつけている。

彼女が最初に演じた役のいくつかが、戦争と太平洋戦域におけるマッカーサーの役割を思い出させ続けたのは、皮肉であると同時にチャンスでもある。早い段階で、彼女はフィリピン人看護師を演じ、戦

16 Willis, *High Contrast*; Parmar, "Hateful Contraries"; Kang, *Compositional Subjects*.

17 Cheng, *Second Skin*; Chung, *Hollywood Asian*.

18 Konzett, "War and Orientalism in Hollywood Combat Film"; Hawley, "You're a Better Filipino Than I Am, John Wayne."

争と撤退のさなかにフィリピンで従軍するアメリカの白人看護師たちのロマンスを中心に描いた映画 (*So Proudly We Hail*, 1943 年) に出演している。彼女がハリウッド、特に 1940 年代で演じることのできる役は、アメリカ人が戦争における自分たちの役割についてよく耳にする空想や、たいていは有色人種の女性についての物語である。アメリカ軍捕虜の裁判を描いた映画 (*The Purple Heart*, 1944 年) では芸者を演じ、ワシントン D.C. におけるマッカーサーのオリエンタリズムと着物への執着を思い起こさせる。必然的に、彼女はハーレムの一員としてキャスティングされる。ハーレムとは、彼女が得意としていた西洋の空想を外挿したもので、この場合は、家庭教師と文明というシャムについての空想である (*Anna and the King of Siam*, 1946 年)。彼女はまた、使用人や秘書の役を数多く演じた——必見のチャーリー・チャン映画では、皮肉なことに、ここ数年で最も言葉を発する役を与えられている (*The Chinese Ring*, 1947 年)。

1950 年初頭に演じた彼女の最後の「大役」は、アメリカ人スパイのフィリピーナお手伝いさん (1951 年の映画 *I Was an American Spy*) と、パーレスク大学を題材にしたモキュメンタリー [フィクション作品] のハーレムダンサーだったが、それほど大きな違いはなかった。どちらも、アメリカとフィリピンの間の発展する関係を育み続けた特別な愛のファンタジーに基づいていた。これらの役は、数は少ないものの彼女の実際の労働時間の大部分を占めており、彼女に定期的な収入を与える実生活の仕事にぴったりと沿ったものであった。例えば、(1940 年代と 1950 年代のロサンゼルスでは典型的な出し物で) エキゾチックな演出が特徴的なナイトクラブのフラダンサーだった彼女は 1949 年の『*My Dream Is Yours*』でナイトクラブのダンサー役として「発掘」された。スクリーン上で、またスクリーン外でも、彼女がした仕事の種類を通して、帝国の愛が彼女に可能な仕事を、彼女に適した仕事を作り続ける様の反復を見ることができる。

最後に、この研究の意義について述べたい。ある種の過激な愛の労働、つまり研究者と対象者の間の別の種類の親密さが、イザベル・クーパーのような物語の修正をどのように可能にするかに目を向けた。イザベル・クーパーの場合、死者は帝国の歪んだロマンスに仕えて生きている。彼女のように帝国の軌道に深く引き込まれ、敵と寝た女性のような「悪い臣民」にはよくあることだが、彼女たちの物語は重要な歴史に貢献するとは考えられていない。

私のバージョンの彼女の物語では、親密さという分析尺度は、規則に従わない創造性豊かなアーカイブを提供する。ただし、受け継がれ大切にしている物語以外の物語のための場所を作ることを私たちが受け入れるのであれば、そしてそれらを帝国の欲望が長らく影響を与えている伝承として理解するようになれば、である。

帝国のジェンダー化された性的権力の関係は、従属者に複雑な人格を与えるために作られたものではない。それは彼女らの価値と用途を定義し、人生の選択肢を減らし、彼女ら自身の欲望と夢を圧制したのである。イザベル・クーパーがそうであったように、それは彼女らを弱体化させた。

彼女の物語を通して、私たちは人々が帝国の範囲内で、時にはそれを超えて、どのように人生を形作ったかをよりよく理解することができると思う。なぜなら、この物語がまさに帝国に縫い込まれており、そしてそれが普通のことであり、時には醜いものでさえあるからだ。

そして、その理解を深めるには、ストーリー豊かな物語を作る方法を見つける義務が残されている。このような物語は、私たちの現在を形作る歴史を理解するのに役立つだけでなく、この世界における私たちの立ち位置や、まだなされてない仕事を理解するのに役立つ。

知花：ゴンザレス先生、ありがとうございます。会場の皆さまから先生にご質問があればお受けしたいと思います。

永野：ご講演ありがとうございます。大変勉強になりました。簡単な質問があります。ダグラス・マッカーサーとクーパーが出会ったのは 1928 年か 1929 年でしょうか。

ゴンザレス：だいたいその頃です。彼女はすでにマニラで俳優としての地位を確立していました。

永野：それはマッカーサーが最初の妻と離婚した後でしょうか。

ゴンザレス：はい。

永野：それからダグラス・マッカーサーは2番目の奥さんと再婚しましたが、それは何年ですか？

ゴンザレス：第二次世界大戦の前ですね。第2次世界大戦でフィリピンに戻る30年代後半には、イザベル・クーパーとの関係は終わっていて、彼は船で2番目の妻に出会います。彼が再婚した直後にクーバーは最初の夫と結婚します。

高城玲（アジア研究センター所員）：マッカーサーの資料として手紙が一部出てきたんですけれども、一方でクーパーのほうの日記とか資料はどういうものがあるって、どういうふうに分析されたのかお伺いさせていただければと思います。

ゴンザレス：マッカーサーの手紙は彼のアーカイブにはなくて、彼を訴えたジャーナリストの弁護士の手元にありました。だから、彼のアーカイブの人たちは、明らかに彼の手紙を保存しなかったということです。イザベル・クーパーからジャーナリストへの手紙はいくつかあります。彼は一種の仲介者のような存在になったので、彼女からの手紙をいくつか持っていて、マッカーサーについても触れられていますが、1930年代というラブレターがあったような時代のものはありません。彼女の文書の所蔵場所はあちこちに散らばっていて、材料が少ないんです。私は多くのものをつなぎ合わせる必要がありました。

山里氏発表へのコメント

泉水 英計（神奈川大学アジア研究センター所員）

本日の講演の中でご紹介のあった新書を拝読し、重ねて本日の山里先生のご発表を伺い、山里先生のご研究は米国公文書の一次資料の読み込みと、米国留学経験者の内部ヒストリーの語りが相補的に組み合っており、文献調査とインタビュー、それぞれの聴取が効果的に発揮されたものだと思います。この本は新書ですし、特に後書きに、涙なしでは読めないようなすごくいい話が載っていますので、ぜひ皆さん手に取って読んでいただきたいと思います。

ここで言う公文書には、沖縄人の留学生在がアメリカでホストファミリーに沖縄の基地問題を訴え、そのホストファミリーが陸軍省に苦言を呈したとして陸軍省から問いただされた現地の米国2世が弁解しているというもので資料としてあります。またインタビューについては、数年前の戦闘で敵国に留学することをどう思うかと質問していることの先入観を剥ぎ取られた、先生は浅はかさでご自分で書いてありましたが、そういうくだりをとても印象深く読みました。

戦後沖縄の住民には沖縄戦を生き延びた人ばかりではなく、疎開者や外地からの引き揚げ者、アメリカやブラジルの移民、両親が沖縄出身というだけでそもそも戦前の沖縄を知らない人まで、さまざまな背景を持っていました。本日のお話でも本当に日本が友軍だったのか、つまり米軍が敵軍だったのかというような語りの証言もありました。その多様性を意識する時、もはや対話の相手は「米留組」という



カテゴリーの客体ではなく、それぞれの希望を抱いて人生を歩む主体的行為者として立ち現れます。そのような人々が「米留」制度の思惑を越えていく様が、積極的に描かれたと思います。

さて、せっかく頂いた機会ですので米軍統治下、沖縄からの米国留学を巡るご考察に、以下の3つの方向から質問させていただきます。第1に日本との関係について、第2にアメリカ社会の観察に関連して、第3に他の国々からの米国留学との比較についてです。

まず日本との関係についてですが、一つは米国留学中の沖縄人と日本人はどのような関係だったのでしょうか。私は米軍統治下の沖縄の医療に関心があり、国民指導員の養成制度、これナショナル・リーダー・プログラムと言いますが、これで渡米研修を受けた人の記録を調べたことがあります。この国民指導員という時の「国民」が何を指すのか、これはとても興味深いところで、日本国民とは区別される琉球国民かとも疑いました。しかし必ずしもそうではない。というのは技術的な研修は個々に行うのですが、例えばワシントンの名所を巡るようなオリエンテーションは、東京から行った人たちと一緒にしていたようなのです。

山里先生のご本で紹介された例でも、横浜から出発した方がいれば、一方で沖縄の嘉手納の空軍基地から出たという方もおられた。沖縄人と日本人の留学生はどれぐらい一緒にされていたのか。一緒になった時にお互いをどのように認識していたのかが気になります。また部分的にでも一緒にされるのは対象言語、つまり日本語のサポートで済むということも要因かと思います。1950年に米国に留学した、例えば台湾人は、中国語でなく日本語の中等教育を受けた者も混じっていたと推察します。沖縄人留学生はこういう旧日本植民地出身者との出会いについて語ることがあったのか、伺いたいと思います。

日本との関係でもう一点お伺いしたいのは、日本留学制度はどこまでプロパガンダと見なすことができるかということです。安定した統治のために米軍は親米的指導者を育成したと言います。同じような視点で日本政府の教育援助を見ることがどこまで可能でしょうか。米国民政府が、契約学生をやめ、国費留学も随時中断の権利を保持していたのは、括弧付きですけど「共産主義」や日本のナショナリズムを警戒していたからだと思います。

では、日本政府自身では親日的指導者を育成する思惑があったのでしょうか。そういう思惑があったとして、日本留学した人々はどれぐらいその思惑をはみ出す主体的な行動を取ることができたのでしょうか。本日のお話で「日留」、日本留学を見ていく必要性に触れられたのは、このような意味だと私は理解しています。

次はアメリカ社会の観察です。渡米後の留学生たちのさまざまな体験を興味深く読みました。特にそれが米軍統治下の沖縄社会を相対化する経験であったことに目を開かれました。例えば民主主義を喧伝(けんでん)しているのに、歴然とした人種差別がまかり通っていたということです。ただし、人種差別は沖縄でも米兵用の歓楽街には、白人用と黒人用に峻別されていたりして、留学前から分かっている人は分かっていたはずです。

むしろ目を引かれたのは白人の掃除夫がいて驚いたというような回想です。あるいは白人の床屋に髪を切ってもらって、違和感を感じたというような回想です。これと似た話として、旧満州で生まれ育った日本人が、日本に初めて来て、日本人の掃除夫を見て驚いたというような回想を読んだ記憶があります。これらはつまり、特定の役割は特定のカテゴリーの人間によって占められ、それがあたかも自然のここのように固定している植民地社会の在り方が、原因となっている違和感でしょう。被植民地者の役割はサービスであるというところからは、先ほどのゴンザレス先生の *Labor of Intimacy* にも通じるように見えます。

アメリカ社会を観察した留学生たちは、沖縄で慣れ親しんだ社会的役割が決して固定的なものじゃないという確信を得ることで、それを自然なものとする植民地的心性、つまり心まで占領されていたということを自覚したと言います。自覚したということは、植民地的心性から一步脱却したということでしょう。その経験は、自分自身を改めて見つめ直す機会でもあったことが描かれています。

留学生たちは自分が敵国人であり、非黒人であり、インディアンに近かったり、韓国人から質問されたりと、多様な米国住民との接触からさまざまな自分を見いだしていったようです。留学生が出会う米

国住民には沖縄系米国人もいたと思います。沖縄戦の記録には、沖縄系2世兵士がよく登場します。あるいは復興援助の時期に沖縄系米国人団体が活躍しました。今日のお話にも少し触れられていました。改めて自分自身を見つめ直す留学生たちは、このような沖縄系米国人とはどういう関係にあったのでしょうか。

最後の質問は、他の国々からの米国留学制度との比較についてです。言い換えると、米国の勢力圏下のアジアパシフィックの国々からの留学制度における沖縄の「米留」制度の位置です。比較の対象にはもちろん日本からの米国留学制度が含まれます。これについては山里先生は既に沖縄に相対的に米国留学生が多かったこと、それからまた沖縄からの米国留学を管轄したのが外交を担う国務省ではなく、陸軍省であったことを指摘されています。日本もまだ占領期であった時ですが、日本では民主化が進んでいるが、沖縄では人々が米軍を前に萎縮しているという大田元県知事の回想が本に載っています。米軍の存在感に大きな差異があったことが分かります。

では、日本以外の国々からの米国留学制度とはどのような比較ができるのでしょうか。韓国や台湾からの留学は、独立国であったから国務省だったと思います。軍ということであれば、海軍が管轄していたミクロネシアからの留学はどのようなものであったか気になります。最終的に米国まで行くのか分かりませんが、米軍による旧日本領の人々の再教育の例を一つ、ご紹介したいと思います。これが米軍による旧日本領、南洋群島の再教育の出発点の写真です。これはバーニス・ローレンスという人の記録に含まれる写真です。

1950年にトラック島に教員養成学校が設立されました。彼女はその教官となりました。日本の委任統治領だった南洋群島では、日本語教育が行われていましたが、戦後は米国海軍が管轄するミクロネシアとなりました。ミクロネシア全体から学生がトラック島に集められ、米国の庇護（ひご）の下で新しい社会をつくるために教員の訓練を受けています。彼らが新世代の最初のインテリとなります。

よく見ると日本的な名前があるんですが、これは現在の小笠原諸島からの研修生などです。軍政研究などでサイパンが沖縄のモデルとなったなどということがいわれます。戦後の米国による教育でミクロネシアと沖縄にどのような共通性と差異があったのか、もし先生が見通しをお持ちでしたら教えていただきたいと思います。

最後にもう一つ、今日この機会に討論に出てきたアジアからの米国留学は、フィリピンからの米国留学でしょうか。筑波大学に鈴木伸隆さんというフィリピン研究者の知人がいます。今日は授業があって残念ながらここには来ていないのですが、彼は山里先生の新書に強い関心を持って、出版されてすぐ読んだと言っていました。それで私は今日のコメントで、沖縄と日本以外の米国留学との比較について尋ねてみたいと彼に言ったところ、彼が教えてくれたのがこの論文でした。

ここにあるペンシオナードというのは、米国がフィリピンを植民地にした後、1903年からエリート養成のために始めた米国留学制度で、第2次世界大戦で日本が占領するまで続きました。鈴木先生はペンシオナードを成功裏に運営した経験が、戦後の「米留」制度に生かされたという仮説のようです。今日はフィリピン専門家が多いので、私がここでこういうことを言っているのは非常に恥ずかしいんですが、後で補ってください。山里先生は沖縄の「米留」制度の成立過程についてどのようにお考えでしょうか、伺いたいと思います。

以上、第1の日本との関係については、米国留学中の日本人、あるいは旧日本植民地の台湾人などとの程度一緒にどのような関係であったか。日本留学制度についてどの程度まで「米留」と同じような分析が可能か。第2のアメリカ社会の観察に関連しては、留学生と沖縄系米国人との関係はどのようなであったか。第3の他の国々からの米国留学については、ミクロネシアとかフィリピンとかからの米国留学とどういう関係にあるか、あるいはどのように比較できそうかお考えを伺いたいと思いました。以上で私の質問です。ありがとうございました。

ゴンザレス氏発表へのコメント

岡田 泰平（東京大学大学院総合文化研究科教授）

今日発表された原稿も大変興味深かったんですけど、長いパンで見たゴンザレス先生のご研究についてもお聞きしたいと思います。多分、私が一番最初にゴンザレス先生の論文読んだのは、*Militarized Currents*（2010）という本の1章だと思います。その後 *Making the Empire Work* っていうダニエル・ベンダーとジャナ・リップマンの本の1章で、ハワイのレイという首飾りを売る労働者の話をされてます。その後ゴンザレス先生の1つ前の著書である *Securing Paradise* を結構前に読みました。

私はフィリピン研究をやっていて、どちらかといえば社会史研究です。ゴンザレス先生の方はいわゆるアメリカン・スタディーズという分野のものだと思います。これは分かりやすく言うと、アメリカ発のカルチュラル・スタディーズですね。日本でも1990年代終わ頃から2000年代始まりの頃にかけては、「カルスタ」と呼ばれる学術が盛んでした。

端的に社会史とアメリカン・スタディーズの違いを言うと、社会史や歴史学一般は、時間軸に沿って変わってきたことを説明する学術です。逆に言うと、変化がないことはなかなか歴史学だと説明できないんです。ゴンザレス先生の論述は、そうではなく、むしろ大きい現象を説明するのに適した方法です。ゴンザレス先生の文章は、どれもすごく読ませるもので、単純に面白いです。

歴史学だとよく理詰めの議論になります。この歴史をもっと細かく見ていくと、こういうような現象がある、というような論述です。ゴンザレス先生の論述は、新しい発想への着眼点という点において優れています。ですので私のゴンザレス先生へのコメントは、あくまでも異なる学術からということ、ややベタな歴史研究からの質問になります。

まず最初に全体像というか、ゴンザレス先生の論述のやり方についてご質問させていただいて、その次に今日ご発表いただいた内容について質問させていただき、そして最後の方でまた大きめの質問をさせていただければと思います。

まず1つ目はいわゆる方法論についてです。社会史から見て、とかくカルチュラル・スタディーズ系の議論というのは象徴的なことを取り上げて論じるというイメージがあります。それに対して、ゴンザレス先生は資料を探し出してくる能力がすごく高く、ゴンザレス先生が探し出してこられた資料については、結構感銘を受けます。

例えば、こちらの *Making the Empire Work* の本ですと、レイを売っている労働者のオーラルヒストリーが分析されていて、端的に言って面白いんですね。こういう対象はハワイの外だとほとんど知られておらず、そういうことちゃんと書かれてることは素晴らしいと思いました。今回のクーパーについての本はKindle版だと大体31ページぐらいに書いてある文献が面白かったですね。20年代、30年代のフィリピンの女性観について書いている興味深い文献がいくつか挙げられています。

贅辞はこれくらいにしてもう少し本質的なことを言いますと、こちらの *Securing Paradise* とか、クーパーに関する一冊本だと、ある時代のことを語っている時に、その時代に属さないような事象をぱっと入れてしまっている箇所があります。例えば相当過去に起きたことともっと後に起きたことを、共通の時代のように論じています。

別に社会史や歴史研究ではないのでいいと思うのですが、そういう叙述の仕方をする、特定の時代にこういうことが起こり、次の時代にはこう変わったというところが捉えづらくなります。つまり、非歴史的な論述になりがちなのですが、1つ目の疑問としては、こういう論述のスタイルを取る理由をゴンザレス先生にお聞きしたいと思います。

ここからは今日の発表についてですが、クーパーという人を取り上げて、親密さに関する研究をして



います。ゴンザレス先生がおっしゃられた言葉で興味深かったのが、ケアをする仕事、ケアワークという表現です。アメリカ人の研究でも日本の研究でも、ケアワークっていった時に大体論じられるのが、例えば看護師や、介護職ですね。あとはドメスティックワーカー（家事労働者）なども含まれます。

この分野ですと、看護師の国際移動の話を扱ったキャサリン・チョイの *Empire of Care* という本が思い浮かびます。そういう対象ではなくて、なぜあまり成功していないようなエンターテイナーをこの文脈で注目しようとしたのかをお聞きしたいと思います。

ダグラス・マッカーサー自身は日本でも相当な有名人です。クーパーは、彼の愛人で最後には自殺してしまう、悲しむべき最期を迎えてしまう人です。忘れられているから、その人を取り上げるというのは、それなりの理由にはなるとは思いますが、もう少し踏み込んで、なぜこの人を取り上げるのかという理由をお聞きしたいと思います。というのは、この時代代表するようなフィリピンの女優というわけでもないですし、後半部分になるとだんだん映画論になります。なんでこの女優なのでしょう。

あとは、この時代のアジア系女性の表象の中での彼女の位置づけも気になります。クーパーが活躍した1940年代のフィリピン人とアメリカ軍との関係の文脈では、彼女はどのように位置づけられるのでしょうか。日本の文脈では、アジア・太平洋戦争直後の研究、いわゆる占領期研究はとても分厚いわけです。特にそこでの女性史の研究はとても多く、その側面から見るとフィリピンの側の戦後直後の歴史は、さほど盛んではありません。共産主義者のフク団がどうやって弾圧されてきたかという以外の歴史はあまり書かれていないイメージがあります。

他方、フィリピンでのフィールドワークの中でこの時代のことを聞くと、フィリピン人女性の話は少なくありません。よく言われるのがハンガン・ピアール（波止場まで）という表現です。要するにアメリカ人の兵隊さんと仲良くなったフィリピン人の女性が波止場まで行くのですが、彼女を残し、アメリカ人はそのままアメリカに戻ってしまうことを指します。クーパーの場合、アメリカに行くわけですが、こういう文脈から見ると、フィリピン社会でこの人は、どういうふうに捉えられていたのでしょうか。

逆にアジア系女性でアメリカに行った人たちに関しては、日本社会にいと米兵の妻としてアメリカに行った人たちの語りは大量にあります。英語文学でよく知られているのだと、パウル・S・バックの『隠れた花』(The Hidden Flower) という小説があります。アメリカに行った日本人女性が人種差別に遭うんですが、最後は混血の息子を出産するという話です。そういう事例と比べると、クーパーは、どういうふう位置付けられるのでしょうか。

また、ケアワークとエンターテイナーという文脈はフィリピン史とも深く関係してきます。マニラ戦はほんとに破壊的な戦場で、マニラの市街地が相当変わりました。例えばエルミタやマラテだと、以前だと高級住宅地だったところが、戦後には赤線地帯になってしまいます。そういう変化とこの人が生きていた背景というのはどういうふうにつながってくるのでしょうか。1940年代のフィリピン人女性のことを語る上で知りたいと思います。

表象研究の立場からも先生のご発表はとても興味深いです。お見せ下さった一シーンでは、タガログ語で Ang Tatlong Hambog と書いてあります。こういうタガログ語はちょっと難しいのですが Tatlong というのは3です。Ang っていうのは主語を表す言葉です。Hambog が難しいですね。タガログ語だと Mayabang という意味のようで、「傲慢」という意味です。だけど Hambog は、英語からの転訛かも知れない。そうだとすると、英語の humbug はスペルが違いますが、その意味は「偽物」です。この文脈で、タガログ語の Hambog は何を意味するのか、あんまりよく分からないんですが。

また、この映画でキスシーンが出てくるわけですが、キスしている男性のほうはフィリピン人でしょうか。そしてキスされているクーパーの方も、フィリピン人ということなのかがよく分かりません。フィリピン人同士がキスしているのでしたら、それが問題になるのはなぜなのでしょう。これはアメリカの文化史だと結構重要な問題で、映画で白人と有色人種がキスするなんてことは、1920年代だったらまずあり得ません。異人種間のキスがたぶん可能になるのは、映画ではちょっと分かりませんが、テレビドラマだと恐らく1960年代です。皆さんもご存じかもしれませんが、SFの「スタートレック

ク」の黒人と白人がキスするシーンが初めてだと思います。

だから先ほどキスして問題になったと言われていたのですが、キスしたことそのものが問題だったのか、違った人種の人たちがキスしたことが問題だったのか、そこがいまひとつよく分かりませんでした。

人種の違いが問題だったとすると、クーバーは、どういう人種として思われていたのでしょうか。日本人は、フィリピン人はみんな一緒だと思うかもしれませんが、アメリカの文脈で言うアジア人か白人かでは圧倒的に違います。表象も違うし、法律上の区分も違います。

法律上の区分で言うと、ゴンザレス先生のご発表を聴いて、クーバーはアメリカに帰化できなかったのかなと思います。もしくは、少なくとも彼女はフィリピン人としてアメリカ移民局の対象になっているのではないのでしょうか。アメリカの移民関係の文書で移民の個別ファイルを見ていくと、そこに肌の色とか書いてあります。

ダグラス・マッカーサーがクーバーのことを捨てていいフィリピーナと思っていたということですが、彼は彼女のことをアジア人だと思っていたのか、フィリピンにいる白人だと思っていたのかも興味深いところです。今でもそうだと思いますが、アメリカ特有なこととして、とにかく人種のポリティクスがすごくある社会なわけですね。その文脈でこの人がどういうカテゴリーに押し込まれていたのか、それが果たして変わっていったのか、変わらなかったのかというところが知りたいです。

あともう一つ興味深いのは、クーバー自身は端役なので作中でその後どうなったのか分からないですけど、アメリカの映画史で重要な議論があると思いますが、キスしたりロマンスになるのはいいのかもしれないけど、より深刻なのは子どもができた場合です。というのも、子どもが混血になるからです。混血の子どもが生まれるというのは、白人優先の社会においては結構スキャンダラスです。

こういう問いの延長として、そもそもアジア系の人白人として表象されることっていうのがあるのか、という点があります。というのは黒人研究の中では重要な問いですが、1920年代から肌の白い黒人が白人として演劇などで活躍するということが結構あります。パッシングって呼ばれますが、アメリカ史の文脈からいうとクーバーの事例は、アジア系のパッシングの事例なのでしょう。

また違った論点から見ると、クーバーは、フィリピン社会と切り離された人ですよ。だから、少なくとも僕みたいに日本占領期のフィリピンのことを研究している人間からすると、この人の親族から聞いたたりした日本占領期の語りはどうだったのかなと疑問が湧きます。それがこの人に対してどういう影響力を持ったのか。例えばマニラに家族がいて、まだいろいろと連絡があるようだったら、家族はやはり相当悲惨な運命を辿ったのではないのでしょうか。そこら辺の語りも知りたいなと思いました。今日のご発表に関しては、およそ以上です。

また先生の学術研究の全体像の話に若干戻りますと、先生のご研究通底するものとして、帝国(Empire)とか入植者(settler)という言葉が前面に出てきます。前著の*Securing Paradise*ではハワイが軍事化されるのと同時に、なぜ観光化されていくのかという問いに取り組んでいらっしゃいました。そこからなぜ忘れられたフィリピン人エンターテイナーと帝国というテーマに関心が移ったのかをお聞きしたいと思いました。単純にある研究者、ある知識人の関心が、一つのテーマからもう一つのテーマに移る過程に興味を覚えます。

もう一つは、先生がこういうテーマに関してご研究をされていて、しかもハワイという場所で教えられていることですね。*Securing Paradise*ではアジア系がハワイに行って住み着くことを、「入植者」と呼んでいるわけですね。いわゆる「入植者植民地主義(settler colonialism)」とすごく親和性が高い議論されていると思います。

アメリカン・スタディーズを实践されている方として、ハワイ社会をいわゆる「入植者植民地(settler colony)」だと思われているのか。そう思っているのであれば、そういう歴史的な文脈と現実に対して、どういう形で研究と教育を实践されようとしているのかもお聞きしたいです。いろいろとぶしつけな質問をして恐縮ですが、どうぞよろしくお願いします。以上です。

総合討論

知花：岡田先生、ありがとうございました。それでは、ここからご来場の皆さまも交えて質疑応答に移りたいと思いますが、その前に山里先生もゴンザレス先生も、いただいたコメントに対するまたコメントか何かあるかなと思いますので、よろしかったら山里先生から、ぜひ泉水先生のコメントに対するまたご回答をいただければと思います。

山里：ありがとうございます。たくさんの貴重なコメントをいただいて、一つずつ回答を用意していたのですが、十分な時間が無いと思います。

まず、日本との関係ですね。オリエンテーションの方は、日本からの留学生と沖縄からの留学生は別々に行われていました。沖縄からの留学生はカリフォルニアのミルズカレッジで行われていて、沖縄の人たちとアメリカの人たちの溝をいかに早く埋めるかということを、一番の目的として実施されていたように思います。陸軍省や国際教育機関、あとミルズ大学の先生も積極的に関わって、琉球からの留学生がどのような振る舞いをしているのか。まだアメリカの学生たちとの溝がある、それをどのように埋めようか、とても親身になって、家に招いたりするなどの積極的な関わりがあったということが資料から分かります。琉球人の留学生を対象にしたオリエンテーションはミルズカレッジの夏季休暇を利用して実施されていました。

アメリカ側はオリエンテーションに力を入れていました。日本からの留学生との関わりは、その時点ではなかったのですが、この別々のオリエンテーションが問題視されて、琉球人学生だけでまとめると、余計にアメリカ人との距離が出てしまうから、そういうのはやめようってということで、1960年後半からオリエンテーションがなくなりました。それ以後、沖縄の留学生と日本の留学生との関わりが多くなっていったかと思います。日本人留学生は私費留学で結構経済的に豊かな方が来ていたということもあるので、日本人と沖縄人という違い、認識を感じた背景には、経済的な環境の違いもあったのかと思います。

あと、アメリカ社会での観察の質問もそうですが、「日留」「米留」とどこまで同じ分析が可能かというご指摘も非常に重要で、「日留」に関してのほうが実は留学生の行動管理は非常に厳しくなされていたようです。留学生に対する思想調査があり、日本でどういった活動をしているのか、それを丁寧に細かく調べていました。また「日留」の場合は安保闘争の学生運動に関わりを持った留学生が結構いることから、沖縄に対する問題意識を高く持ち、経験に違いがあったと思います。

他の国々における米国留学との関係は私も非常に関心があって、これは学際的に共同研究が実現できたらと思っています。フィリピンの米国留学制度であったり、ミクロネシアの米軍の再教育について今回教えていただいたのですが、時代と対象が違えばアメリカ型の留学制度と植民地の統治実践には何か共通があるのではかなと考えています。

強制的に統治を強いるのではなくて、いかに主体的に留学生自身がその統治の体制を支持していくかという、主体性を重視した統治実践であったという点に、何か共通点が見いだすことができると思います。フィリピンの場合は植民地主義的な実践が色濃かったかもしれません。共通点として主体性を重視した統治実践を少し細かく見ていきたいなと思います。

知花：山里先生、ありがとうございました。ではゴンザレス先生。

ゴンザレス：コメントと私の著作を読んでくださったことに感謝します。いくつかの質問に答え、残りに関しては追ってお話ししたいと思います。



(映画の中のクーパーの)キスについての質問ですが、異人種間のキスではなく、フィリピン人同士のキスでした。以前はハリウッドだけがやっていたような非常にアメリカ的な行動だったためにスキャンダラスと捉えられました。しかも、カトリックの大聖堂の前で撮影したのです。そういったことで非常に怒りを覚えた人たちもいました。これがキスについてです。

クーパーがフィリピン人と見なされていたのか白人と見なされていたのか、そして彼女の法的地位がいかなるものだったのか、というのはいい質問だと思います。簡潔に答えるなら、それは誰に尋ねるかによって変わります。マッカーサーはクーパーをフィリピン人だと捉えていたと思います。それこそが、彼がクーパーとは結婚せず、2人の白人妻とは対照的に不義の愛人としていた理由です。

彼女の移民としてのステータスにもある種の不透明さがありますが、それはこの時期の多くの移民の地位が曖昧だったことによります。彼女は船で行き来するとき、父親に由来するアメリカ市民権を主張し、自分の姓を用いました。そして彼女自身、特にハリウッド時代は自分がフィリピン人女性であるか、白人でアメリカ人であるかについて、とても戦略的かつ創造的に使い分けていました。

彼女は自分の年齢についてもよく嘘をつきました。彼女はとても創造的な人で、公文書にも彼女が自身について述べた嘘が書かれているので、公文書館で彼女の経歴をたどるのはとても難しかったです。この本のリサーチに時間がかかったのはそういう理由でした。彼女は有名な俳優ではないのになぜ彼女について書くのか、その理由について質問されましたが、彼女が有名でないからこそ書くのです。実際、彼女はよく話題となり、多くの人が夢中になるキャラクターでした。

多くの人々が、このフィリピンの女性が報われない愛に苦しんだり愛されなかったが故に自殺をしたという物語に魅了されました。しかし私はそれが真実ではないと思います。というのは彼女が自殺したのは1960年で、彼女とマッカーサーの関係は1934年に終わっており、その後彼女は二度結婚していたからです。私は歴史家ではなく、自分の専門はカルチュラル・スタディーズだと考えていますし、文学研究出身です。しかしこのケースでは、私はこの物語が誤解されていると考え、再び調査する必要があると感じました。

Securing Paradise から *Empire's Mistress* にどのようにテーマを移行させたかについてですが、実際には両者は非常に関連しています。*Securing Paradise* では、帝国の非正規または合法的なアーキテクチャーを考察しています。なぜ売春やセックスツーリズムを取り上げなかったのかということは多くの人に訊かれましたが、ある意味でこの物語はそれらの要素と関係しています。そして、私はいつも秩序を乱す、行儀の悪い女性に惹かれてきました。

知花：ゴンザレス先生、ありがとうございます。それでは会場の皆さま方、何かご質問あるいはコメントがありましたらお受けしたいと思います。

一般参加者2：クーパーが自殺した理由について、美貌で、美しい人だったのが年齢に伴い容姿が衰えたからという理由なんでしょうか。

ゴンザレス：分かりません。彼女はロサンゼルスで自殺したので、ロサンゼルス郡の公文書館で記録を調べましたが報告書はありませんでした。死亡診断書と薬物過剰摂取という判定から彼女が自殺したと分かるだけです。この時点で彼女は60歳近く、ハリウッドの有色人種の女性としてそれは実質的に死刑宣告のようなものでした。だから、確定的な証拠はありませんが、孤独感が原因だったと思います。仕事を得られず、60年間にわたりモノ扱いされてきた人物です。ですから彼女が絶望に陥っていたと考えています。



知花：ありがとうございます。他にご質問、コメント等ございますか。

岡田：山里先生にご質問ですが、さっきペンシオナードと沖縄の「米留組」のお話が出たんですけど、私は最初に研究したのが植民地教育で、そこでペンシオナードの話もちょっと触れました。教育行政の中だと、ペンシオナードは圧倒的にエリートになっていく人たちですね。そういう表象のされ方もとても大切で、一番有名なのがカミーロ・オシアスっていう人です。でもさっき山里先生のお話を聞いたところ、「米留組」でそういう政治エリートになっている人は少ないという印象を受けたのですが、そういう理解でいいですか。それとももっとエリート養成的な側面がこの留学制度でもあったのでしょうか。

山里：エリートってところが、ちょっと沖縄の文脈で難しいところかなと思います。沖縄戦で荒廃した沖縄で一から社会を形成していく中で、知識を得てリーダーとして育っていくという一面はありますが、それをエリート育成と呼ぶべきかというところが私自身の中ではまだ腑に落ちていないところですね。

岡田：数の問題もあるかもしれませんが、単純に言うと、フィリピンの教育行政制度の中だと比較的トップの方にアメリカ人が残っていて、その人たちがやめていった際に跡を継いだ人に、フィリピン人の元ペンシオナードが多いというイメージがあります。だからペンシオナードの場合は行政官の養成という一面があります。しかし、沖縄の場合、もっと中間層の教員層の養成を目指していた、という印象でした。そこら辺の違いをどういうふうに理解したらいいのかというのが質問の趣旨です。

山里：中間層の育成ってところが大きかったと思います。ただ復帰に伴い生活が大きく変わり、「米留組」の中には職を失った者、外資系企業や民政府自体の職がなくなることがあったので、留学経験という資本が維持されているわけではなかったと思います。

知花：ありがとうございます。私も実はいくつか質問はありますが、お時間になってしまいましたので、ここで質疑はいったん終了とさせていただきます。以上をもちまして神奈川大学アジア研究センターシンポジウム「アジアとアメリカ帝国のはざまを生きた人々の物語り」を終了させていただきます。最後までご参加いただき誠にありがとうございました。

後記：当日のゴンザレス氏の発言は全て英語によるが、本稿編集に際し質疑応答の部分については編者が翻訳・整理を行った。

(編集：むらい ひろし 所員 神奈川大学外国語学部教授)